

第2部会のまとめ(未定稿)

目標	基本的な視点	政策の基本的な方向	戦略的・重点的な取組みの方向性
<p>一人ひとりが能力と関心を生かして活動できる、居場所とつながりがあるまち</p> <p>互いに支えあいながら、一人でも安心して暮らせるまち</p>	<p>健康長寿と支えあいのまち 区民のさまざまな活動が、結果として個人の健康長寿に寄与し、互いの支えあいにもつながっていくまちの形成につとめます。</p> <p>居場所とつながりのあるまち 一人ひとりの区民が、年齢や心身の状況にかかわらず、能力や状況に応じて自分の力を発揮し、いきいきと生活できる、居場所とつながりを重視したまちを目指します。</p> <p>支えあいの中で、ひとりでも安心して生活できるまち 区と区民の協働や医療・介護・福祉の連携、同じ課題や悩みを持つ人同士のつながりなどにより、介護や援助が必要な人も、家族がいる人もいない人も、住みなれた地域で安心して暮らしていける仕組みづくりを推進します。区はこれまで培ってきたサービスの水準を保ちつつ、個人の能力がさらに発揮できるように支援するとともに、支援が必要な人に対するセーフティネットの力を高めていきます。</p>	<p>(1)健康でいきいき だれもが参加できる、心と体の健康づくりの機会と場を整備します。一人ひとりの健康管理・健康増進につながり、自分の健康を自分で守れるよう、健康診査などの仕組みを整備します。感染症や食の安全など危機管理対策の取り組みを進め、関係機関と調整して地域医療体制の充実を図ります。</p> <p>(2)互いに支えあう 年齢や性別、障害の有無や立場を越えてお互いが理解しあえるよう、心のバリアフリーを推進します。孤立を防ぐため、これまでの地域のかかわりに加え、同じ興味や関心でのつながりを重視し、多種多様な縁による地域づくりを推進します。就労や社会参加などにより自分の力が発揮できるよう、その人にとっての参加しやすい場づくり・つながりづくりを推進します。同じ経験や課題を持つ人同士がつながる仕組みを構築します。</p> <p>(3)ひとりでも安心 地域で安心して生活ができるように、医療・介護・福祉が連携した環境と基盤を整備します。だれもが安心して暮らせるよう、在宅生活に支援が必要な人のためのさまざまな「住まい」を整備します。高齢になっても、障害を持っていても、自分らしく生きていけるように、きめ細やかな日常生活支援や権利擁護の制度を推進します。施設のバリアフリー化などを通して、だれもが出かけやすい・利用しやすいまちづくりを推進します。医療や生活に不安がある人に、地域の関係機関と連携し、必要な支援ができる体制(人材育成・場の確保)を整備します。</p>	<p>(1)地域で孤立することのない仕組みづくりの推進 ひとりで生活していても孤立することがないように、これまでの地域のかかわり(地縁)に加えて、同じ興味や関心によるつながり(関心縁)を重視し、区民がさまざまな縁により重層的につながるような仕組みづくりを推進します。</p> <p>(2)在宅生活を支えるしくみと基盤を整備 医療・介護・福祉の連携により、病院や施設から在宅につなげる仕組みづくりを推進するとともに、在宅サービスの充実やそのための施設整備を図り、住みなれた地域での生活を続けられるまちを実現します。</p> <p>(3)必要な人が必要な情報を簡単に手に入れられる仕組みの構築 参加や居場所づくりにつなげるため、「参加したい」「支援したい」「相談したい」と思ったときに、同じような経験や関心のある人、相談先などの情報をすぐに入手できる仕組みを構築します。</p>

調整部会での検討事項

(1)災害時の要援護者対策

高齢者・障害者や医療を必要とする人への災害時の支援について、日常生活に戻るまでの中期的な生活支援なども含めて検討する必要があります。

(2)区の情報提供体制整備

情報提供体制の整備については、区全体にかかる課題として、検討する必要があります。

これまでの主な意見等の整理<第2部会>

参考資料

【全体を通して留意すべき視点】 自助 共助 公助を横軸にした整理(特に共助を掘り下げるべきでは) 安全・安心のまち 個人情報の適切な活用 教育・意識改革

健康	参加	生活支援
<p>【主な検討テーマ】</p> <p>健康づくり 心の健康・自殺予防 相談・情報提供(健康不安への対応)</p> <p>疾病予防 介護予防 医療(救急医療、高齢者医療)</p>	<p>【主な検討テーマ】</p> <p>就労 (障害者、高齢者、生活困窮者、子育て中の女性 保育) 地域・社会参加 ボランティア活動</p> <p>コミュニケーション支援 移動支援 ネットワーク・情報連絡体制 (緊急時に機能するためにも) 引きこもり</p>	<p>【主な検討テーマ】</p> <p>介護・援助 同居家族がいることを前提としない 支援 介護・援助のための人材育成</p> <p>災害弱者支援 (緊急時の支援、復興期の支援) 介護者支援 住まい 権利擁護</p>
<p>【主な意見等】</p> <p>1. 健康づくりについて</p> <p>健康の問題が、国と都道府県の事業から、地域が主体的に対応する方向に変わってきている中で、財政面からどこまで区が対応できるかという課題がある。健康に関するこれまでの区の取組は評価できる。メリハリをつけながら、引き続き進めていってほしい。</p> <p>今後は、健康に対する人々の意識(自分の健康を守っていくかというモチベーション)をどうやって高めていくかということが重要である。行政としては、健康づくりにつながる、あるいは間接的に健康の維持増進につながっていく区民の活動を支援するという基本的なスタンスになるのではないかと。</p> <p>多くの区民に参加してもらうためには、区民のいろいろな活動と行政の取組がタイアップできるとよい。</p> <p>例えば、病院に来る方は健康に対するモチベーションが高いので、健康に関するプログラム等を情報提供することで、健康づくりのすそ野が広がるのではないかと。</p> <p>健康な人生とか頑張る人生といった言い方ではなく、楽しい人生を送るという視点で考えるとよい。そうした中で、医療の続きとしてではなく、自分自身が楽しく、あるいは仲間と一緒に動くことで自分自身も活発に活動するようになり、仲間を助けていけるという、参加型の新しい形の地域社会ができればよい。</p> <p>健康面では、心の問題が非常に重要である。体が健康でも心が健康でなければ真に健康とは言えない。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>人を助けることを楽しみながら、自分の健康をつくっていけるような社会づくりと、そのための区の支援(区民の健康づくり活動や取組へのバックアップ~情報、機会、便益の用意等~)を進めていく。</p> </div> <p>2. 医療について</p> <p>都の二次医療圏は、他県と比べて人口数が多いという課題がある。東京都に働きかけるなど、区の果たすべき役割があるのではないかと。</p> <p>急性期から慢性期までのすべての医療を区内で完結させることは困難。今後は、病院連携や医療と福祉・医療と介護の連携などのシステムづくりが大切である。</p> <p>訪問看護と訪問介護、往診する医師と病院の病診連携は、かなりできている。今後、在宅を進める上でも、在宅と急性期医療機関をつなぐ中間的な療養型(通過型)の施設が重要である。</p> <p>在宅介護や在宅医療等において、家族が疲れてしまうというのが一番大きい問題。ショートステイなどにももう少し機能性を持たせることができないか。</p> <p>急性期以降の対応策として、医療機能が加わったショートステイが考えられる。自宅や老人保健施設のほか、高齢者専用賃貸住宅など、地域に根ざした多様な住まいが広がりつつある。増えている空き家の活用などができれば、住まいの問題も変わってくるのではないかと。</p> <p>在宅を基本に、必要な時にいつでも医療や介護が受けられる仕組みが必要。医療・介護では人材確保が重要。例えば、施設で働く介護士が誇りを持って、働き続けられる待遇の改善が必要であり、それが国の制度として不可能であれば、杉並区独自の計画を立てるということができないかと。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>医療連携や、医療・看護・介護の連携により、地域の中で安心して療養ができるような仕組みづくりを区として支援していく。</p> </div>	<p>【主な意見等】</p> <p>年齢や障害の有無等に関わらず、家庭や地域社会の中で、支え、支えられるという関係になっていくことが広い意味での参加と言える。これを杉並の地域社会の中でどのように実現していくかがポイント。</p> <p>参加することにより、社会の中で自分の役割を持ち、それによってモチベーションを高めて自立につながっていくことが大事。</p> <p>参加することにより、お互いを認め、役割を認め合うことで、自らの楽しみにつながるというように、楽しむことが参加の基本とも言える。区民が楽しみながら参加をしていくような区を実現するために、行政は何をしたらよいか。あるいは、行政の役割というものはあるのか。</p> <p>「場所」、「手法」、「主体」の3つの側面から見ると、杉並区では、「場所」は充実してきており、「主体」についてもNPO活動等が広がっている。一方で、「手法」について、多くの区民の参加を促す上で、いかにアクセスしやすい情報が発信されているかという情報提供面での課題がある。</p> <p>こういう能力を持つ人にはこういう活躍の場がある、こういう障害を持つ方にはこのような社会貢献ができるなど、行政が出来る限り具体的な情報提供を行うなど、多くの区民の参加の後押しができるとうい。</p> <p>その人の能力や状況等に応じて地域社会に参加する、区民参加型の杉並区をつくっていくために、行政として何をすべきなのか。</p> <p>障害者・高齢者・幼児など、弱者の参加を地域で支えていくノーマライゼーションの教育が大切。他人を思いやる心が自然と身につくような機会を行政はバックアップしてほしい。</p> <p>参加を妨げている見えないバリアに対して、教育・意識改革をどう働きかけていくか、ノーマライゼーションと言わなくてよい社会をつくるのが大切。</p> <p>拒否も一つの参加であり、その人なりの選択の自由を尊重しないといけない。</p> <p>昔の日本や地方のような助け合いは、参加が「目指す」ものではないか。区民の意識を改革して、自然に支え合うといった参加が理想。</p> <p>参加することを保障していくシステムをつくるのが、参加、きずな、人間関係につながる。そのためには、情報を一人一人にきちんと伝え、相手の感情を尊重することが大切。</p> <p>情報の収集・発信の問題や、受け入れ側の意識にも問題がある。情報の提供や参加には様々な方法があるが、「知らない」ことに対して教育も含めどうやって対応していくかが課題。</p> <p>福祉は、弱者の視点で考えることが必要。能動的な参加だけでなく、参加しようとする意思をどう受け入れていくかが重要。積極的な参加、消極的な参加のほか、目に見えない参加もあるかもしれない。参加の側面支援、基盤作りが区の役割となる。</p> <p>ひきこもりについては、その人の関心の状態を理解することが大切。たくさんある選択肢を一つひとつ示し、意思を確認していくことで、信頼関係が築け、参加につながる。</p> <p>「健康」を謳っていない日常活動の中での参加にも、健康や生きがいにつながるものが多い。</p> <p>「人と人との絆」「つながり」「心地よい居場所を見つけること」等、参加の表現もいろいろ考えられる。</p> <p>参加の段階にはレベルがあり、ハードルが低ければ参加する人も多く、多様な機会があればいろいろなことができる。区は、社会福祉法人やNPOに参加への取組を勧めたり、団体が力を発揮できるよう、情報交換の場を設けたりする必要があるのではないかと。</p> <p>子育てや介護などの団体・サークルの経済基盤が弱い。参加の敷居を下げるためにも、会議室の無料化等の支援が必要。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>参加には、積極的、能動的、受動的などいろいろな形があり、「つながり」「居場所」という表現がふさわしい場合がある。都市部では、地縁だけではなく、関心縁や、同じ困難を抱える人のつながりなど、様々なつながりを生かしながら地域社会全体の中での居場所を確保していくことが必要になる。区は、これを支援するとともに、積極的に情報の発信や提供方法を工夫し、区民の参加の機会を提供・拡大していく。</p> </div>	<p>【主な意見等】</p> <p>病院から在宅生活へいきなり移行することは難しい。また、中間施設においても、施設を出るとなったとき、その後のケアを組み立てられないことがある。</p> <p>サービス付き高齢者住宅が必要であり、みどりの里にケア機能を付加してはどうか。</p> <p>いつかは誰もが介護に直面することとなるが、介護について学校などで学ぶ機会がなく、介護することとなって初めてその実態を知ることになる。</p> <p>現在でも、様々な事情で介護したくてもできない人はたくさんおり、今後はますます、家族に介護の負担を求めていくことが難しくなっていく。</p> <p>在宅介護は家族だけの介護ではない。イギリスでは一般のボランティアも加わっており、在宅支援のあり方を根本的に改める必要がある。</p> <p>介護で「教育」は一つのキーワード。高齢者のいる家族は、何かを相談することについて後ろめたさを感じている。ある年齢に達したら、今後の生活に向けての準備(施策を知ってもらい、相談してもらいなど)を促す必要がある。</p> <p>施設も含めた様々な形態の在宅ケアのサービスを整え、それらを家族がいることを前提としない在宅ケアの仕組みとして組み立てていく。</p> <p>サービスの多様な組み合わせが基本であり、施設と在宅ではサービスの段差がある。施設と在宅という二元的な考えでなく、「杉並区全体がケア施設」と考えることや、高齢は特別なことではないと考える。</p> <p>シームレスな(継ぎ目のない)軟着陸できるケア体制が築かれていかなければならない。</p> <p>共助として「地域の人がどこまで介入できるか、どこまで担えるか」という点は難しい。都会では地域の支え合いを全面的に期待することには無理がある。</p> <p>「共助」で地域の人助けということも大事だが、すぐそばで、周りが理解しているということも伝えることも大切である。</p> <p>情報は、受け手側の意識がないと伝わらない。関係者が地図を作るなど情報提供の主体となることで、地域の物知り屋さんが増え、地域全体の情報認知が高まる。そのような参加してもらう仕組みを入れ込む。</p> <p>ケア24や相談支援事業所といった相談機能を強化していく。</p> <p>高齢者や障害者へのケアの悩みを近隣者には打ち明けにくい、同じ境遇の人には話しやすい。家族会のようなグループに、必要なことだけを提供するようなピンポイントなやり方ではないと情報は伝わらない。</p> <p>支援が必要な人には、媒介してくれる人が必要である。都会では近隣者が媒介者となることは難しいが、同じ境遇の人ならば媒介者となりえるので、ここに情報を流すことでその情報が広がっていく。</p> <p>プロシューマー、ピアカウンセラーなど、高齢者、障害者、介護者など自らも参加していく、という地域社会をつくっていく。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>今後、高齢者に同居者がいないことが普通になり、1人暮らしの被介護者が増加することから、家族がいるということを前提としない支援方法を構築していく。</p> <p>入院、老健、ケア付き住宅などの施設、在宅を支える通所・訪問サービスなどが、うまく動いていくシステムを整備していく。</p> <p>区が発信し周知するだけではなく、人・地域の団体を介した情報提供という、情報の流れをつくっていく。同じ境遇の人々が参加するネットワークに情報提供し、そこから情報が広がる、という参加型の情報獲得型社会を築いていく。</p> </div>